



Line Up

- ・農福連携「百」の農業 春の陽 今井勝仁・浅井真
- ・日本の障害者芸術の展開について 企画事業部 窪川敦之
- ・のはら楽団・おやつ工房 由井 美涼
- ・僕の商い、繁盛してまっせ！ 菜の花 廣瀬 政光

その他

22

平成 29 年 (2017)

12 月発行 22 号

農福連携「百」の農業

春の陽 今井勝仁・浅井真

田畑の多い峡北、色の変化を見るたびに春夏秋冬を感じる自然豊かな地です。稲刈りが済んだ田んぼ「はざかけの馬」「整然とならぶ切株」、畑の「秋野菜」を見ると哀愁を感じます。その風景の中に哀愁とは無縁の風景が多く見えるようになってきました。雑草に覆われた雑草田や雑草畑の耕作放棄地です。

耕作放棄地になる理由としては以下の二つが考えられます。



- ・採算が合わないとか人手が足りないから今は放置し、いずれは農業を再開したいと考えている場合。

- ・後継者などの目途が立たず、今後も農地に戻さず農業を再開できる見込みがない場合。



少子高齢化にくわえ、職を求めて若者の田舎離れも、農家の人手不足や後継者問題の大きな要因の一つです。

一方、障がいを持った方々には「障がい者雇用促進法」という法律ですべての事業主は、進んで障がい者を雇入れに努めなければならぬと規定されているにも関わらず仕事探しが難しく、一般より就業率が低い、さらに資金（工賃）も少ないという問題をかかえています。

昨今、農福連携という言葉がテレビや新聞でよく耳にします。前文で書いた農業と障がい者の双方の課題をリンクさせ、後継者不足の「農」と多様な働ける場を確保したい「福祉」の二つが一致、地域の活性化を目指す取り組みです。従来から農業を福祉の現場に取り入れる試みがありました。どちらかという障がい者支援が中心で、引きこもりやニートなどの生活困窮者への支援は、それほど多くなかったが、最近になって生活困窮者の支援にも拡大し、地域の活性化につながる働きになっています。



農家の人のことを「百姓」と言うことがあります。「百姓」とは、文字通り「百」の「姓」

ということですが。「百」は「たくさん」という意味です。

つまり農業には百の仕事がある、言い方を変えれば農業をすることは「百の知恵」を学ぶこと、障がい者一人一人の個性にあった多様化した仕事があるのです。



農産物生産の現場だけでも以下のような仕事があります。

播種・育苗管理・圃場準備・定植・間引き・追肥・土寄せ・除草・誘引・収穫・調製・出荷・ハウスの整理整頓

さらに加工、販売に広げ六次産業化や地域の農家からのニーズに応じて農産物の委託請負を

したりすることで多くの仕事を作ることが出来ます。

春の陽でも六次化に向けて加工場を新設したり、利用者の皆さんの働く場を広げています。現状では春の陽農場の生産現場で収穫・調整作業の場で就労A・就労Bの皆さんが中心に働いています。

現在、春の陽で管理している農地は田んぼが約一町歩、畑が四町歩ほどです。田んぼではコシヒカリ、もち米、黒米。畑では玉ねぎ、にんにく、人参など三十種類を超える野菜を生産しています。また大豆、小麦も作っており、毎年1トン以上の生産量上げるまでになっています。どの作物も全て無農薬、無化学肥料での栽培です。

小麦は中力粉の「きぬのなみ」と強力粉の「ゆきちから」の二種類を生産しています。どちらも春の陽にある製粉機で小麦粉にしています。小麦粉は楽一、豆の花、のほら楽団おやつ工房で使ったり、また白州道の駅での販売を行っています。道の駅ではゆきちからの全粒粉が人気です。

収穫した野菜は豆の花の食材として使われたり、ひまわり市場や白州道の駅、また東京のマールシェなどでの販売も行っています。今年四月には菜の花二階に給食センターが完成し、十月現在で三名の就労Aの利用者さんが働いていま

す。主に春の陽、のほら楽団、菜の花の利用者さんの昼食をつくっており「キッチンのはら」と呼ばれています。ここでも毎日、春の陽農場で生産された野菜が使われています。安心安全、おいしい農場の野菜がもっと利用者さんの口に入るよう、給食メニューの工夫、見直しを毎月行っています。

野菜の中でもここ数年で春の陽の主力作物となりつつあるのが人参です。作付面積も年々増えており、今年度は2トン以上の生産を目標にしています。北杜市の給食センターへの納品を軸に、ひまわり市場や道の駅での販売も行っています。人参は利用者さんにとって扱いやすい作物で、収穫、葉切り、洗い、選別、計量、袋詰めの流れがとても良い仕事になっています。また、土中や雪中に保存することで春先までの継続した出荷が可能で、農作業の瘦せる冬場の大切な仕事になっています。また、傷のある「B級品」の人参を活かすために、豆の花の並びに加工場を造りました。すでにトマトや人参ジュースの生産を始めています。小さな加工場のため、小ロットでの請負い生産が可能であり、地域農家からの委託も受けられる体制を整えていく計画です。

このような取り組みが地域の活性化、また利用者さんの充実した生活につながるよう、今後も継続した活動を行っていきます。

日本の障害者芸術について フランスから見えてきたこと

「2017ジャパン×ナントプロジェクト」

「KOMOREBI」展を通して

企画事業部 窪川敦之

前号の「虹いろ」でもご紹介した、本年6月半ばから8月頭にかけて日野春學舎で行われた「2017ジャパン×ナントプロジェクト」の「KOMOREBI」展に向けた作品の集約作業と、さらに、その内容と意義を紹介するために同じく日野春學舎で行われた「アール・ブリュット in 山梨」(7月29日(土)、30日(日))を経て、いよいよ本番である「KOMOREBI」展及び関連イベントが、10月21日(土)よりフランスのナント市において開幕となりました。

この一大イベントの運営を支援するため、全国の連携団体からスタッフが招集され、当法人からも小泉晃彦本部長とアート担当の瀧澤聰さん、新田千枝さんが渡仏しました。さらに、このイベントに参加して国際交流を図るとともに、憧れのフランス旅行もできるという国際交流ツアーも計画され、全国から総勢約430名とい

う大旅行団が組まれました。当法人からも、利用者さん有志7名と引率スタッフ4名に加えて、杜の風の理事長須田晶子様とNPO法人ゆいの水津令子様、さらに長年アートの顧問をしていた北村雅子先生も参加して下さいました。しかし、引率チームには海外旅行は初めてというスタッフもおり、利用者さんの引率という不確定要素を抱えての旅行に、期待に胸を膨らませつつ、まずは無事に帰国できることを祈りながらの渡仏となりました。

東京(羽田空港)からパリ(シャルル・ド・ゴール空港)までの約12時間の空の旅と、パリからナントへの6時間のバス移動を無事に終え、現地時間で10月21日(土)午後6時(日本とは7時間の時差があるため、日本時間では同22日(日)午前1時)。会場となったフランス国立現代芸術センター「リュ・ユニック」は、このイベントに参加するために日本全国から集まったアール・ブリュット作家やその家族、上演する演目の演者や指導者、障害者関係団体の当事者・家族、支援団体、地方自治体の関係者に加えて、地元フランスの方々で超満員となり、冷えた外気を吹き払うような熱気に包まれていました。さらに、オープニングイベントが行われたホール「グランドアトリエ」からも人が溢れて、会場スタッフの配慮によって利用者さんと引率スタッフを優先的に誘導していただけなかったら、席にも

座れないような状況でした。

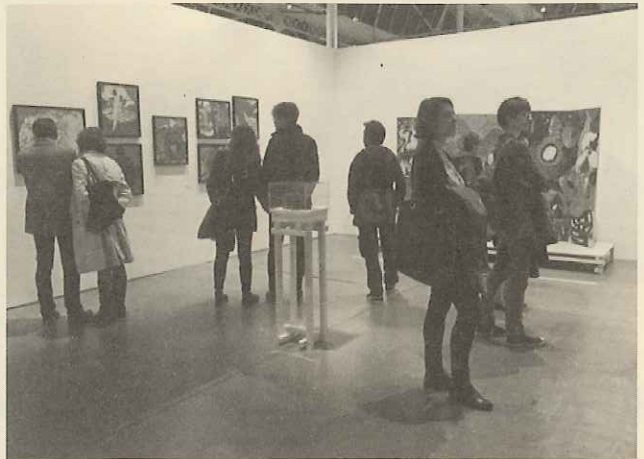


このように慌ただしく始まった開会式でしたが、スタートから友好ムード一杯で、ジャン・マルク・エロー前外務大臣夫妻の臨席の下に、ナント市長のジョアンナ・ロラン様の挨拶、木寺日本国フランス大使の挨拶、藤原文化庁文化部長、「リュ・ユニック」館長パトリック・ギゲール様、並びに「シテ・デ・コングレ」館長ポール・ピヨドー様等このイベントにご尽力いただいたフランスのアート関係者の挨拶に続いて記念演奏会となりました。世界的な打楽器奏者のウィル・ガスリー氏と長崎県の南高愛隣会「瑞宝太鼓」のコラボという夢の共演は大いに盛り上がり、様々な垣根を越えて会場が一体となっ

たひとときでした。

また、ホールに併設された「KOMOREBI」展の会場では、地元の方々が作品の一点一点に真剣に見入る姿があり、先の演奏と合わせて、まさに芸術によって言葉を越えた文化交流が生まれる現場に立ち会うことができ、その効果と意義の大きさを実感することができました。

今回のイベントの成功の背景には、滋賀県の社会福祉法人グローの理事長北岡賢剛様（本法人の理事も勤めていただいています）をはじめ、関係する方々の長年のご尽力があり、決して一朝一夕で実現されたものではありません。2008年にヨーロッパを巡回して好評を博した「JAPON」展及び、2010年にパ



リのアル・サン・ピエール美術館で開催された「アール・ブリュット・ジャポネ」展等の成功によって日本のアール・ブリュットが持つ芸術性の高さが世界に発信され、その後の活動による日仏両国政府を巻き込んだの地道な積み重ねが、今回の大きな成果につながったのです。

障害の有る無しに関わらず、正規の芸術教育を受けていない作者によって制作された作品の中に、高い芸術性を有する作品が存在します。これは「アール・ブリュット」という概念の根本となる考え方ですが、その意味については、まだまだ一般に浸透しているとは言い難いのが現状です。しかも、作家の多くはいわゆる障害

者といわれる社会的弱者であり、適切な支援が無ければ、作品の多くは世に知られること無く埋もれ失われてしまいます。彼らの作品に光を当て、彼らの権利を守りつつ世に問い、社会の意識をも変えていくための確かな支援の枠組み作りが必要なのです。

去る11月18日(土)、山梨学院短期大学で行われた「山梨フォーラム2017」のまとめのシンポジウムでも、パネリストとして登壇された厚生労働省の朝川知昭様から「国として「裾野を広げる」（厚労省 障害者芸術文化活動普及支援事業等）という視点と同時に、「優れた才能を伸ばす」（文化庁 戦略的芸術文化創造推進事業等）という視点を踏まえた取り組みが進められている」という趣旨の発言がありました。全国的な普及支援によって活動の広がりと底上げが図られて裾野が大きく広がると共に、活動の中から見出された優れた才能はさらに引き上げられ、国内はもとより世界に向けて発信されるステージに立つことができるという、全体として大きなピラミッドが建ち上がるイメージが見えてきます。今回の「2017 ジャパン×ナントプロジェクト」を含め、「2020 東京オリンピック・パラリンピック」に向かって国を挙げた盛り上がりを見せようとしているこうした動きは、私たちの活動にとっても大きなチャンスと言えるのです。

今回のナント研修は、初の利用者さんをお連れしての海外旅行でした。グループホームで生活をされているので、普段どうい過ごされ方をしているのか知る良い機会になり、これからの対応や支援に活かしていきたいと思います。
 次回はより多くの方がこのような機会を得、生活により良い影響を与えられれば良いと思いました。

倉園 憲



メリーゴランドが楽しかった。少し疲れたけど色々なイベントは楽しくて勉強になった。大聖堂とか初めて見るものが多かった。機械で動く動物などがすごかった。
 矢崎和哉さん



2017年10月19日~26日 フランス・パリ・ナント 8日間の旅



人が多すぎて想像と違って動けなくて疲れました。次はもういいと思うけど、楽しいこともありました。
 中沢克文さん

メリーゴランドを見たことや、イベントが楽しかった。ごはんは食べられないものもあったけど、美味しかった。
 五味真理伊さん

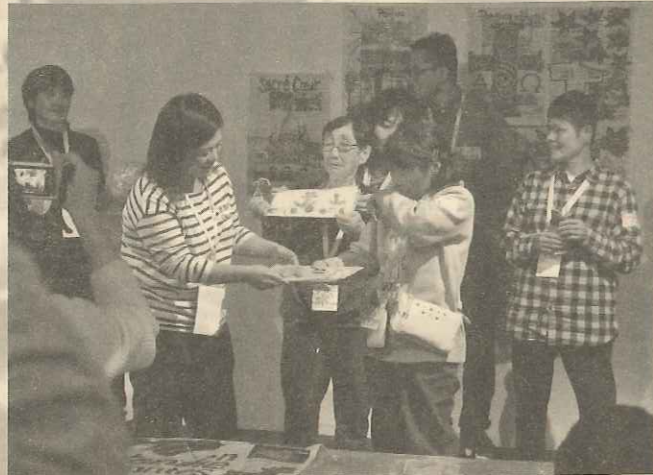
2017年10月19日~26日 ハヶ岳名水会関係者 総勢 17 名の大冒険



今回のフランス旅行は良かったです。飛行機はシートベルトをしていたので怖くはなかった。フランスでは、いろんな場所を回ったけど、ぐるぐる回るやつに乗ったのが一番楽しかったです。
 瀧澤 清治さん



飛行機がよかった。日本にはない建物が良かった。同じようなメニューで食べ物があったので、和食を食べたくなった。イベントはみんな障がいがあるのによくやっているなと思った。
 田村 たい子さん



星の里からは3名の利用者さんと一緒に行かせて頂きました。日本を離れフランスに行くことは利用者さんをはじめ職員も不安と緊張で一杯でしたが、フランスの方々の優しさに触れ、自然と笑みが見られるようになりました。また、日本の障害のある方のアート作品や瑞宝太鼓・自由劇場などの舞台作品を私自身とても感慨深く拝見させて頂きました。
 ワークショップでは、粘土や画用紙などを使って自由にアート作品を作成しました。利用者さんにとって自由に作品を作ることとはとても難しかった様ですが、楽しかったと話されていました。今回の旅行ではとても貴重な経験をさせて頂きました。ありがとうございました。
 髙崎 加奈

のはら楽団・おやつ工房

由井 美涼

旧日野春小学校一階の廊下を東に進むとつきあたりに「のはら楽団・おやつ工房」はあります。現在八名の利用者さんがおやつ作りに携わっており、午前九時半から午後三時半まで作業をしています。一日にクッキーやマフィン、マドレーヌ、パウンドケーキなど多くのおやつを作っています。これらのおやつは、のはら楽団や春の陽、菜の花の利用者さんのおやつになっています。また、食事処「豆の花」や玄関にある「無人販売」、さらに外部にも販売しております。

さて、おやつ工房ではコンセプトを持ち、日々おやつ作りに励んでいます。それは、「食品添加物を極力使わず、材料にこだわっている」ということです。先に挙げたように、おやつ工房で作ったおやつは多くの方に召し上がって頂いています。その全ての方々に「安心して食べて

頂きたい」という気持ちが込められています。材料は、主に同事業所内豆の花・豆腐工房で作られたおからや豆乳、又春の陽・農場で栽培、加工された小麦粉を使用しています。各事業所で、一人一人の利用者さんが出来る仕事を設けています。更に原材料や加工の様子も誰もが分かるようになっていきます。その為、おやつを作る人も食べてくださる方も安心して利用できるように工夫しています。

そして今回、我々は新しい形で商品を販売しています。それは、先ほど紹介した八ヶ岳名水会で作られている豆乳、小麦粉を使用した「豆乳シフォンケーキ」です。以前からカット売りして販売していますが、この度、十一月二週目よりホール売りを開始しています。又、味の種類も増え、「プレーン・紅茶・抹茶」の三種類を展開しております。価格は八五〇円で、のはら楽団の利用者さんが作った「新聞バック」に入れ、提供させて頂いています。一週間以上の余裕をもって、お電話にて予約を受け付けております。ぜひこの機会にのはら楽団・おやつ工房を利用してみてはいかがでしょうか。



僕の商い、 繁盛してまっせ!

菜の花 廣瀬 政光

どうですか? 良い笑顔でしょう? この方は、生活介護通所事業所菜の花利用者さんの坂本卓也さんです。菜の花を利用し始めて十一年になります。菜の花では普段、パソコンで色々な活動をしています。菜の花では、プライベートではバンド活動をしているのですが、ボーカルを担当しているそうです。物静かな方ですが、いつも笑顔とジョークを絶やさないナイスガイです。

最近、と言っても2年前からですが、彼の仕事の一つ増えました。それは、ジュースや缶コーヒーの自動販売機の仕事(商い)です。

NPO法人ジョブクリエーターさんから委



託された、菜の花棟前と日野春學舎体育館前に設置されている自販機の2台でジュースや缶コーヒーを商っています。

彼の商いの具体的仕事は、自動販売機のジュースや缶コーヒーを売ること、売れて欠品となった商品を自販機に補充すること、菜の花においてある在庫を管理すること、在庫がなくなったら発注することです。

もともと、パソコンはお得意だったので在庫管理や発注のための表計算ソフトを使うことはお手の物でした。商品を補充することや在庫を調べることはスタッフの補助がいるのですが、自販機の欠品を調べることや発注は彼一人で行っています。

「何が楽しいの?」と聞くと、「自販機の中を見られたことや補充するときのカシャカシャ音が楽しい! 毎月少しでも貯金出来ることも。」
「これからはどうしていききたい?」と聞くと、「希望は、売上を伸ばすことと、台数を増やし



て関わることの出来る仲間(利用者さん)を増やしたい。」と嬉しそうに答えてくれました。
それでも仕事には苦勞が付きもの。たかがジュースの自販機ですが、されど自販機。彼が新しく覚えなければならぬことも多いのです。

取扱商品の商品知識はもちろん、売れ筋商品の見極めやシーズンごとの販売期間が短い商品の仕入れ量をどうするか? 加えてジョブクリエーターさんや納品の業者の方とのやり取りなどなど、「本当に商いはムズカシイ。」と笑って話していました。

大変だと言いつつも彼は、菜の花に来れば毎日、一日に3回は自販機を見に行き欠品がないか調べています。本当に真面目な男です。

どうか皆さん! 日野春學舎や菜の花に来られたら、是非、買って下さいな!

缶コーヒー100円から取り扱っています! あっ! 忘れた! ガールフレンド募集中です! (笑)



当たり前の生活を目指して〜日中活動のめざゆいJIN

当たり前の生活とはなんでしょう？嫌なことを無理やりさせることでしょうか？楽しいことを思う存分やることでしょうか？私たちは常に利用者さんにとって「当たり前の生活」とは何かを考え、日々、仕事をしているのだと思います。

昨年9月より、星の里では生活リズムを整える為の活動（作業）を3つの班に編制しました。・重度の障害を持った方、年を重ねた方々が自分を大切にゆつくり過ごしたりすることを目的とした「重度高齢班」・自らが望む生活をするために様々な余暇活動を経験し、これからの生活へと活かしていく「活動選択班」・年齢的にも若く、しっかりと働くことで見合った対価（工賃）をもらったり、生活リズムを作ったりしながら地域移行など今後の展望を考える「若年輕度班」です。

心掛けたことは「自分らしく生活する」ということ。利用者さんがやりたいことを活動にし、その活動に参加したい他の利用者さんがその活動に参加し、集団での活動となる。自らが望んで活動することで、「やらされている」ではなく、「望んでやっている」という気持ちに。自らのペースで、終始和やかに活動することができています。当たり前の生活にはまだまだ長い道のりかと思っていますが、確実に一歩踏み出すことができているように思えます。個々に寄り添い意思をくみ取り、共に生活をして全力でサポートしていきます。

星の里 日中活動部リーダー 山坂太相

ゆつたり、まったり、いい湯だな♪

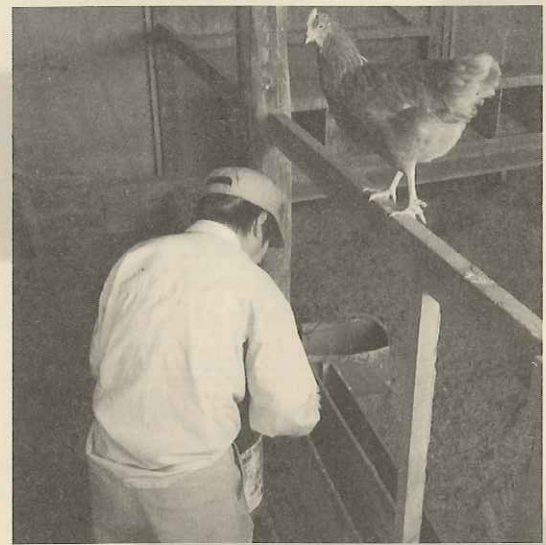
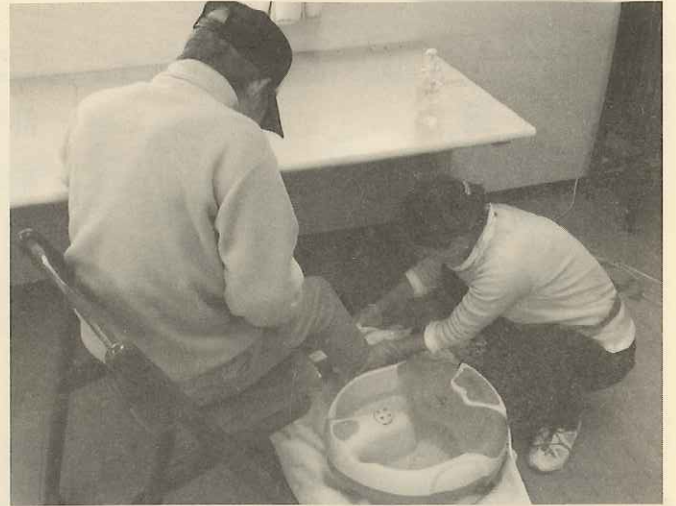
重度高齢班では、主に星の里敷地内にある「金木屋」とGHランタンで活動しています。金木屋では、利用者さんの体調や身体状況に考慮しつつ、健康体操やカラオケ、調理実習など、無理せずにゆつくり過ごせる余暇を行っています。また、浴室もあるため、ひとりひとりゆつくり入っていただいています。GHランタンでは、金木屋よりもさらに少人数でさらにゆつくり過ごしていただける場所になっています。

また、月に数回ですが、少人数のグループを組み、温泉や食事といった外出も計画し、利用者さんに楽しんでもらえるよう実施しています。

今後、星の里ではますますの高齢化が懸念されます。そんな状況でも、高齢となった利用者さんの健康に配慮しながら、楽しく、ゆつくりと、充実した、ひとりひとりが満足できる活動を行っていききたいと思っています。

重度高齢班班長 藤本良介





「私たちの生産品も買って下さい！〜野菜、卵、薪〜」

若年輕度班は、主に年の若い利用者さんを中心として、生産活動を行う中で活動（作業）に対するモチベーション（働く＝対価）を実感していただく。活動は主に3つに分かれています。

☆畑 係：敷地内の畑にて地面を耕すことから始まり、農作物を生産・出荷するまでを一年を通して行う。

☆薪 係：木材加工の工程で出てくる端材を回収し、ご家庭やキャンプ場にて使われる薪に加工を行う。

☆養鶏係：豆腐工房からいただく、おから・残飯等を配合してエサ作りをし、エサやり、採卵、洗卵、販売までを行う。

自分達で育て、収穫し、採卵したものを実際に調理し食べたり販売を行ったりと食べること、買ってもらうことを通して仕事に対する意欲を持ってもらうことを第一に活動しています。最後に：是非星の里でとれる野菜と卵、薪をご購入ください。

若年輕度班班長 小松央征

その人らしさを生み出すために

活動選択重度班では、毎月個別のケース会議を行い、利用者さんのニーズにあった活動を検討、提供しています。班の拠点でもある「らっかせいハウス」では主に、カラオケや笑いヨガなどのレクやアートなどの創作活動に力を入れて活動を組み立て、利用者さんが自ら活動を選択し、安心して生活を送れるよう日々考えております。

今後は、更にアート活動に力を入れて、星の里でのアート展や他で開催されるアート展にも出展できるようにしていきたいと思っております。その折りには是非、足を運んでいただきたいと思います。

最後になりますが、これからも利用者さんの願いに寄り添い、充実した一日を遅れるように尽力していきたいと思っております。

活動選択重度班班長 中田果



ありがとうございます！

○ 題字を書いてくださった方

のはら楽団 看護師 仲山 保子様

○ 表紙の写真をくださった方

春の陽スタッフ 高柳 優様

素敵な字と写真をありがとうございました！

訃報

春の陽利用者 依田 源一様

三月十二日 享年 四十九歳

星の里利用者 飯窪 とみゑ様

五月十六日 享年 六十七歳

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

編集後記

まもなく、平成二十九年が終わろうとしている。毎年この時期になると必ず「その年」の流行語が注目される。私はいつも、ノミネートされた言葉をひとつひとつ読み返し、一年を振り返ることにしている。今年の年間大賞は「インスタ映え」と「付度（そんたく）」が選ばれた。「付度」とは森友学園問題や加計学園問題などの報道を通じてよく耳にするようになった言葉で、難読語辞典には「他人の気持をおしはかること」という意味が示されているが、いまいち使いどころなどが理解しにくいのも事実。何となく悪いイメージがついてしまった「付度」だが、人の気持ちを「推し測る」ことが人間として生きていく上で、いかに大事なことをよく考えるようになった。私たちの仕事にはとても大事なことだと思う。今年も色々あったが、元旦に起きたトルコでのテロ行為が始まった一年だった。ISの犯行声明が出たが、来年こそは穏やかな正月を迎えたい。そして、平和な一年であるよう心から祈るばかりだ。

錦

社会福祉法人 ハヶ岳名水会

〒408-0031 山梨県北杜市長坂町小荒間 1095-7

TEL 0551-32-7355

FAX 0551-32-7350

E-mail hoshinosato@coast.ocn.ne.jp

URL <http://www4.ocn.ne.jp/~hosi7355/>

広報委員会スタッフ

錦見祐治（陽だまり） 廣瀬政光 穂坂雄太（以上菜の花） 遠山 萌 浅川恵美
小松寛明（以上星の里） 高柳 優（春の陽） 由井美涼（のはら楽団） 魚田和輝（ぼーら）
立川瞳（相談支援） 井上加奈（らいむ） 谷戸道彰（企画事業部） 法人事務局

